

青島市と言えば誰しも思い浮かべるのは、「青島ビール」と「ドイツ」ではなからうか。しかし青島市の歴史と市域の広さを見ると、これらは青島のほんの一部を表しているに過ぎないことがわかる。

まず市域であるが、10,654km²と想像できないくらい広い。日本との比較では、都道府県の中で7番目に広い岐阜県(10,621km²)がほぼこの面積に相当する。市では比較のしようがない。中国は日本の約26倍の面積なので驚くにはあたらないかもしれない。

現在我々が観光する青島市は、主としてドイツが租借した膠州湾を取り囲むように置かれた7つの区部だけと言っても過言ではない。区部の総面積は1,102km²で市全体の約10%である。青島市には傘下に5つの市(県級市)があり、その面積のほうが圧倒的に広いわけである。また歴史を見ると、その昔は後述する「瑯琊」と「即墨」が青島市の中心ともいえる場所であり、今の海に面している区部の歴史は百数十年にしかない。

昨年(2012年)夏の昼過ぎ、私は青島流亭国際空港に降り立った。青島は2008年に来て以来である。手荷物カウンターでトランクを受け取り、外に出ると年配の中国人女性が寄ってきて、「日本人か。どこに行くのか」と聞くので市内だというと、「100円でいいからうちのタクシーに乗ってくれ」という。OKすると少し離れたところに連れて行かれた。5分くらいしてタクシーが1台来てそばに止まった。見るとすでにお客が2人乗っている。日本ではあまり考えられないが、中国ではよくあることである。走り出してしばらくすると、給油するからガソリンスタンドによるという。これはさすがに日本では考えられない。空港は市内からかなり離れており、1時間かかったが無事ホテル前で止まった。

青島山芋^{shān fú}大酒店という海沿いにある4ツ星ホテルである。市内地図を見るとこのホテルから、北京オリンピックのヨット会場であった記念公園が近いことがわかり、カメラ片手に歩いて行った。入り口に大きな立体文字で作られた「青島オリンピック帆船中心」が置かれている。いかにも目立ちたがり屋の中国らしい演出だなと思った。そして、「そうか、ヨットは中国語では



青島オリンピック記念公の入り口に置かれた、立体文字の記念モニュメント



海岸線に沿って係留されている無数のヨット

帆船というのだ」とここで初めて知った。

公園内に入ると、右手に伸びる海岸線に沿って無数のヨットが係留されている。壮観である。海洋都市という感じがする。奥のほうに当時のオリンピックの展示館があったが入らなかった。全体的に遊園地のように、親子づれにはいいところだ。

ホテルで少しゆったりしようと思つくと、フロントのあたりに「啤酒節(ビールまつり)」のポスターが掲げられている。訊ねると、ここから東へタクシーで15分のところにある「青島国際啤酒城」でビール祭りを開催中だということ。さすがに中国のビール発祥の地だけのことはある。青島ビールの工場と博物館には2008年の時見学したので、ここのビール祭りはどんなものかと思いタクシーに乗った。大連では毎年8月に大規模なビール祭りがあり、大盛況なのである。星海広場という中国国内でも一二を争う広さの会場で、約2週間に渡って開催されるのだ。啤酒城に着くと入り口に

「第22届青島国際啤酒節」と書いたアーチがかかっていた。大連のビール祭りは昨年が14回目のはずだが、やはり青島市の方が歴史が長い。

このあたりで膠州湾周辺(区部)の歴史を簡単に振り返ってみたい。青島が近代化に向けてすこしずつ形を整えるのは、19世紀後半に中央の役所の分局が置かれ始めてからという。1891年に清政府が国防上の観点から、ようやく膠州湾口からすぐの青島湾内に軍需物資の供給のための棧橋を造った。この棧橋がのちのち青島市の代名詞的存在になっていくのである。

さてドイツが山東半島に足場を築くのは、日清戦争後である。つまり日本に対して仏、独、露の三国が行った三国干渉(1895年)においてである。そのうちドイツは1898年に山東省で発生したドイツ人宣教師殺害を口実に膠州湾を99年間の租借地とした。ところがその後勃発した第一次世界大戦で、連合国側に付いた日本がドイツに宣戦布告し、同湾にあるドイツ要塞を1914年に陥落させている。

その後、日本の中国に対する過酷な21か条要求とそれに対する中国国内の抗日の五・四運動が起こる中で、日本の大陸進出を阻もうとした米・英両国の圧力により、取得したドイツの権益は1922年に日本は中国に返還している。1997年までイギリスに99年間租借されつづけた香港と対照的である。抗英の五・四運動はなかったのであろうか。

ドイツは16年間青島を占領したわけであるが、その間日本が満州国時代に長春などに理想的な街づくりを行ったように、この地をモデル植民地とすべく欧州風の街並みを整えていった。その当時の雰囲気は後述する八大関景区や天主教堂や総督府旧址などここに名残がある。また有名な「青島ビール」は1903年にドイツの投資家が、故国のビール醸造技術を導入してビール製造を始めた。これは租借地経営の一環としての産業振興策であったようだ。

ところが第一次大戦後のベルサイユ条約(1919年)で日本はドイツの諸権益を引き継ぐことを認められ、青島ビールも日本の大日本麦酒が経営を引き継いだ。前述のように1922年に山東半島の権益を中国(中華民国)に返還したが、青島ビールの経営のみ大日本麦酒が継続して行った。それも1945年の第二次世界大戦の敗戦で青島ビールは中国に接収され、以降今日に

至っている。

中国で一番有名な青島ビールは今でも中国各地で生産され、中国最大の生産量を誇っている。この青島ビールのラベルのデザインを機会があれば見ていただきたい。ロゴはさきほど述べた青島湾の棧橋の先端に建てられた八角二層の「回瀾閣」である。二階に上がると旧市街と美しい海を望むことができる。青島七景の第一に挙げられているようだ。確かに夕日が沈むシーンを思い浮かべれば一幅の絵のようである。棧橋は石造りで幅10メートル、長さは約400メートルと湾の中央部から沖合に向けて突き出ている。ここには両側にびっしりと土産物店が朝から夜遅くまで営業している。棧橋からの夜景も美しく、一日中賑わっている。青島市を初めて観光される方はまずこの棧橋をおすすめしたい。

ビール祭りに話を戻すと——啤酒城のアーチをくぐると、テント式の簡易な建物がズラリと並んでいる。建物ごとに各国のビールの看板を掲げ、色とりどりのネオンサインで煌びやかに装飾している。夕暮れ時であったが大勢の人が会場を埋めていた。外から中を伺うと舞台が設えてあり、そこで歌ったり踊ったりしている。ともかくどの建物からもボリュームをいっぱいあげた音楽が迫ってくる。長テーブルがいくつも並べられその間をビール瓶や料理を持った従業員が走り回っている。

おそらくいつもの冷やしていないビールだろうな、と思いつつ立ち止まって見た。私のようにあまりアルコールを嗜まない者でも、ビールは冷たいのがおいしい。ともかくビール祭りは、活気に満ち溢れているが、年のせいかやかましいだけで、ちょっとついていけない。大連ほどの規模ではないがそれでも奥の方まで会場が続いてなかなかの祭りである。多くは若者で年配者は少ない。若者のストレスとエネルギーの発散の場に見える。

中国はどこに行っても騒々しい印象が強い。タクシーに乗れば大きな音でラジオの音楽をつけている車が多い。何度か「軽一点儿」と言って、ボリュームを下げてもらったものだ。どこの観光地に行っても音楽が流れている。静かに何かをしようという雰囲気の場合とかイベントは、どの都市に行ってもあまりお目にかかったことがない。

そうした中で、「八大関景区」はとても静かな住宅街で、ゆったりと散歩できた。別世界のような静けさであった。八大関景区とは、嘉峪関(甘肅省)路、山海関(河北省)路、正陽関(安徽省)路、など中国の八か所の関所から名付けられた8本の通りがあったことから、この周辺をそのように呼ぶようになった。ここは、1930年代に駐在していた各国の官僚や資本家が趣向をこらして建てた別荘群であるが、今でもその多くが保存されている。2002年には「国家文化財」に認定されたそうだ。

この中で最も有名なのは、ロシア人が設計・建築した「花石楼」であろう。花崗岩を使用した重厚な建物はとにかくすばらしい。多くの要人が利用したそうだが、蒋介石も別荘として利用していたという歴史的な建造物である。デンマーク様式で建てられたという、尖がり屋根に壁面が濃いブルーのメルヘンチックな「公主楼」にも行ったが、残念ながら中には入れなかった。公主楼はデンマークの公主(王女)が避暑に来た時のために造ったそうだが、実際には公主は来なかったらしい。デンマークと中国は当時いかなる関係であったのだろう。

近年の中国はどんな地方都市に行っても、マンションや高層の商業施設ばかり目につく。従って、このように閑静な場所にある広い庭付きの戸建て住宅群は貴重である。ドイツ統治時代の雰囲気は十分残っている。

ここから西にすこし行ったところに「康有為故居」がある。康有為はご存じの通り歴史上の人物であり、ここでは簡単な紹介にとどめたい。私が彼の故居を是非見たいと思ったのは、彼は1858年に広東省で生を受け、その後は北京の紫禁城を中心に活躍したのに、なぜ青島に私邸があり、お墓まであるのかということである。

彼は清末から民国初期にかけての政治家・思想家であり、また書家でもある。傾きかけた清国の改革に乗り出したとき、西太后に光緒帝ともどもつぶされ、彼は命からがら日本に亡命した。日本人女性を妻とし、日本の要人にも多くの知己を得るなど日本との縁も浅からぬものがある。1911年に辛亥革命が起き、翌年には清朝は滅亡し彼はようやく故国に戻ることができた。清朝再興への思いが強く、皇帝を戴く立憲君主制を主張したが時勢は急展開をみせ、もはや彼の主張は



康有為故居の書齋

古い考え方として急速に支持を失っていった。

年齢も60歳に近かったと思うが、その後の足どりは詳しい資料が手元にないので、推測するしかない。晩年は昔からの同志もほとんどおらず、むなしい日々を送ったのであろうか。日本人の奥さんはどうしたのであろうか。上海に住んでいたようであるが、1923年に以前訪れたことがある青島に家を購入した。この家が今でも残っている。

海に見える高台でとても気に入ったらしい。気候がよく、美しい風景のこの場所は彼の激動の人生の疲れを癒すには最適のところであったのではないだろうか。この家の前に立つと、彼が終の棲家としたのがわかるような気がした。石造りの立派な邸宅で、以前はドイツの提督の家であった。外階段を上がって二階に行くと彼の書齋がある。壁には彼の書いた掛軸がいくつか掛かっている。あまり上手な字ではないな、とその時思ったが帰国して調べると書家でもあることがわかった。私のような素人には分からない字体である。

ネットで調べると、彼の書を、〈行草に鄧石如の隸・草書の筆意を取り入れた霸気の多い書風〉と評していたが何の事だかさっぱりわからない。どなたか解説して頂けないでしょうか。

彼はこの家に約4年住み、1927年古希を迎えた年に病死した。お墓は近郊の「浮山」の山裾にある。この年は、蒋介石が南京に国民政府を樹立した年であり、「南昌起義」のあった年であった。歴史の話が多くて肩が凝った方もいらっしやると思うが、青島市の区部を語るとき近代の歴史抜きには難しい。次回はもっと古い時代の青島市と、道教の聖地である「嶗山」を中心に紹介したい。

(次号に続く)